

研究課題名	自己血管バスキュラーアクセス狭窄病変に対する経皮的血管拡張術におけるパクリタキセルコーティングバルーンカテーテルの治療効果
研究責任者名	広島大学病院 腎臓内科 教授 正木崇生
研究期間	2022 年 1 月 13 日(倫理委員会承認後) ~ 2023 年 3 月
対象者	2021 年 4 月から 2021 年 9 月までに、試料・情報の提供機関においてパクリタキセルコーティングバルーンカテーテルによって自己血管バスキュラーアクセスに対し経皮的血管拡張術を受けられた患者さん。
意義・目的	<p>わが国の慢性透析療法の現況(2019 年 12 月 31 日現在)によると、血液透析患者数は 30 万人を超え、その多くは持続的な血液透析を施行するため自己血管もしくは人工血管を用いて血液透析用バスキュラーアクセス (VA; Vascular Access) を作製します。VA は血液透析患者のライフラインとなりますが、しばしば狭窄などで機能不全を起し、血液透析を行う上で十分な血流を確保できないことがあります。VA 修復は、大きく分けて外科的再建術と、透析用 VA に生じた狭窄部位を血管内に挿入したバルーンカテーテルによって拡張する経皮的血管形成術 (PTA; Percutaneous Transluminal Angioplasty) によって行われます。従来外科的再建術によって VA の開存が維持されてきましたが、現在では PTA が VA 狭窄の第一選択の治療として広く施行されています。しかし、PTA を施行しても短期間のうちに再狭窄をきたし、頻回に治療を施行しなければならない群が一定数存在し、これに対する対策が必要となっています。</p> <p>VA 再狭窄の主因は血管内膜肥厚による VA 内腔の狭小化である。薬剤コーティングバルーン (DCB; Drug-Coated Balloon) カテーテルは抗増殖薬を VA 壁に直接送達することができ、内膜肥厚による再狭窄を抑制することにより開存期間の延長に寄与する効果が期待されています。</p> <p>今回我々は短期間に再狭窄をきたした症例において、DCB を使用した PTA を施行した症例の、開存率の改善効果について検討するため今回の研究を計画しました。</p>
方法	<p>本研究は、診療録 (カルテ) 情報を調査して行います。</p> <p>カルテから使用する内容は年齢、身長、体重、性別、既往の有無 (糖尿病, 心血管疾患)、血液透析歴、PTA 情報などです。</p> <p>(個人を特定可能な情報は解析に用いません)</p>
共同研究機関	ありません
試料・情報の提供機関	<p>原田病院、呉医療センター腎臓内科、呉共済病院腎臓内科、中央内科クリニック</p> <p>広島大学に情報を集め広島大学 (研究責任者 正木崇生) が解析します。</p>
試料・情報の管理責任者	広島大学 腎臓内科 教授 正木崇生
個人情報の保護について	調査内容につきましては、プライバシー保護に十分留意して扱います。情報が個人を特定する形で公表されたり、第三者に知られたりするなどのご迷惑をお掛けすることはありませんのでご安心

ください。

研究に資料を提供したくない場合は、各受診機関にお申し出ください。お申し出いただいても不利益が生ずることはありません。

問合せ・苦情等の窓口

〒734-8551 広島市南区霞 1-2-3

T e l : 082-257-1506

広島大学病院腎臓内科 教授 正木 崇生 (研究責任者)

広島大学病院透析内科 准教授 土井 盛博 (研究担当者)

広島大学大学院医歯薬保健学研究科腎臓内科学 大学院生 佐藤 彩加 (研究担当者)

研究機関：広島大学